

五

明治六年～七年

(表紙)

家譜 慶永公

従明治六年一月  
到同七年十二月

二百十卷追加

五

## 明治六癸酉年

一月一日益御機嫌能被遊御超歲、年頭御式昨年之通ニ而稍御差略

御加ヘ相成候、御屋形向一日斗上下着用候事、正二位様午前七時  
御供揃ニ而、真崎御邸江御祝詞為被仰上被為入候、御家從之面々

御出門ニ而、真崎御邸江御祝詞為被仰上被為入候、御家從之面々

當御邸江御祝詞申上之儀ハ、三ヶ日之内勝手次第罷出候様兼而御

沙汰被為在候、但シ當御邸執務之御家從ハ、非番之面々ノミ稻荷

堀御邸ニ於テ、正四位様・御前様・信次郎様御同座、御札被為請  
候也

於御上屋敷年始御礼申上之次第

伊藤 輔 井上 徹

右於御座之間御礼申上、結ひ長袍御直ニ被下之

中根 新 白井久人 蟹江太平

沢木禄平 堀 庸 山沢 簡

香西皆雄 井上三男吉 竹内常矩

山本 武 佐野 久

右於同席二行ニ出御礼申上、長熨斗御直ニ被下之

高橋太一

右御次ニ而御目見被仰付候

一右畢而御前様・信次郎様江於御座之間一連ニ罷出御礼申上候事

一正二位様江年始御礼申上之儀ハ、真崎御邸江追々ニ罷出候事  
一足羽県出仕之面々追々に御祝詞出頭致候

一格別御懇意之面々御祝詞罷出候節者、於御前御酒肴被下置候  
密相蒲鉾  
類之

一一月二日正二位様八時御出門赤坂離宮江御参上、御帰路御宗家德  
川様江御年札御勤被遊候

天璋院様

本寿院様 青目籠入鴨・野菜  
実相院様

従三位様 白紙壱本

右御持參ニ而被進之

一一月三日元始祭ニ付御両公様御参拝被遊筈之処、御所勞ヲ以御断、  
御届相成候

一一月七日御前様・信次郎様・真崎御邸江御祝詞トシテ被為入候

一月廿八日左之通区務所江御届相成候

足羽県貴属士族  
正二位松平慶永借受人  
家徒白井久人 三十八才

同人母 美代 六十三才  
妻 花 二十九才

長男光太郎 十一才  
かめ

傭人 東京地方十三区壱番組瀧田村六軒町  
武拾七番地立花勝五郎娘

同同

佐野 久 三拾七才  
母 いね 五十八才

妻 とよ 卅武才

正二位松平慶永

家丁 中野良助 三十才

渡辺友作 三十才

今川新助 三十一才

中村多助 四十二才

今村藤四郎 二十七才

中島雄一 三十二才

正二位松平慶永  
家婢  
熊本県士族上田輔妹

室田 三十九才

一月十二日

御人少之処精勤二付月給  
七円二被成下候事

山沢 簡

一二月十五日今度有明樓ら出火二候処、真崎御邸御別条無之

静岡県士族粕屋美貴娘

ふち  
十九才

足羽県士族小林太仲妹

らく  
二十六才

熊本県士族中村実娘

たき

第一大区拾壱小區神田小柳町  
壱丁目式十番地茶屋与兵衛娘

むつ  
二十才

家婢傭人  
安房国安房郡安裾村農平兵衛娘  
右同断農石井半次郎娘

こま  
二十才

第一大区小五区本沼町壱丁目大倉兼吉娘

くま  
二十才

第一大区小八区京橋南紺屋町田中清吉娘  
たつ  
十九才

メ

右正二位様御次子供ニ被召抱、御充行御次廻り並之通被下候事

皇后宮

歌人 女官

一三月廿日於天徳寺元尾州様貞慎院様御法事御執事ニ付、九時御出

門ニ而御参詣、左之通被供之

一御香奠金弐百疋

省 題者

点者

一御香奠金弐百疋

此間暫入御、哥人暫時退席

次詠進

一(マ)四月廿四日本日越前大安寺ニ於テ大安院様式百回御忌御法事被為

在候ニ付、天徳寺江為御像拝御代參沢木禄平被仰付、左之通被供

之

御両君様方御香奠金弐百疋

何茂哥人江於候所御菓子一巻ツ、賜り候事  
詠進御探題 慶永

一四月廿一日左之通御廻章

廿一日麝香之間詰之内中山従一位・九条従一位・御名・嵯峨従

以上

二位・池田従二位・池田従三位江従宮内省廻章到来、皇后宮御

哥会被為在候ニ付、廿二日第一時參集候様ニとの事

明治六年四月  
メ

中々ニミヤヒ也けり春風になかはちりにし山さくらかな

一四月廿三日

以上

明治六年四月

メ

一四月廿二日前記皇后宮御哥会ニ付、召之面々第一時參集、宮内省

江伺天機且出頭届致候事

歌会次第

(御用有之福井表江立帰候處  
今日帰着)

香西 成

メ

一四月廿七日左之通御届相成候

慶應三年丁卯年 同戊辰年

在京

隱居 正二位松平慶永

右御届申候也

皇后宮御出席

各着席

次探題

明治6年(1873)

明治六年四月廿七日

御同列中様

一五月四日淨光院御祥月ニ付御兩公天德寺江御參詣被遊候

御香奠 金百疋ツ、

但淨光院様ニ限り年々御祥月二者御香奠被供候事

一同日夜第一時頃皇城炎上ニ付、御上屋敷より香西成直ニ罷出申上候  
処、即刻御供揃ニ而御參朝被遊候、左之通御書下ヶ留置候様被仰  
出

五月五日午前第一時皇城炎上ニ付、人力車ニ而參朝、衣体洋服、  
坂下御門より吹上滝見御茶屋江参り、宮内少丞迄名刺差出シ伺  
天機、赤坂離宮御立退之旨承り候ニ付、直ニ同所へ參上伺天機、  
夫より天前江罷出伺御機嫌直ニ退出候事

一五月五日中山従一位殿・九条従一位殿より之御廻章

今晚禁庭炎上絶言語奉恐入候、乍併主上・后宮益御機嫌能赤坂

離宮江移御恐悦奉存候、右ニ付麝香間一同より不取敢伺天機、皇  
后宮へも同様御看獻之儀兩人申合取斗仕候間、為御心得早々御  
案内申入候也

五月五日

道孝

忠能

麝香間

但シ御進献御割合御一軒向三拾七錢、後日御廻達有之御出金相

成候

一五月九日皇城炎上ニ付、御両君様より不取敢金貨弐千両御献上被遊  
候ニ付、御書面相副堀庸持參候処、吉永典事落手相成候(内)

但シ前以御献金相成度旨御願済ニ而御差出之思召之処、猶東京

府知事大久保一翁殿へ伊藤罷出及内談候処、御同人直ニ差出候  
而宜条御差図ニ付、如此御取斗ニ相成候事

皇城炎上何共不堪驚愕奉恐入候、就而者甚微少之至却而如何  
共奉存候得共、金弐千両不取敢献上候、乍恐御手許御書籍等  
万分为ニも被為充被下置候ハヽ、本懐之至難有仕合ニ奉存候、  
尚臣等之微衷可然御取綴被下宜御執奏所冀候也

明治六年五月九日

松平慶永

東京府知事大久保一翁殿

一同日松栄院様十七回御忌御相当ニ付、今九日より十日朝迄於天德

寺御法事御執行被遊候ニ付、前以不斷院江申越置、且左之御方々  
江為御知差出候事

江為御知差出候事

御宗家様 天璋院様江

田安様

阿部様 清心院様江

一橋様 順誠院様江

細川様

松平確堂様

前田従三位様

一正二位様より御附御法事御座御執行被為在候

右同断ニ付左之面々御寺詰として罷越候事  
御家令扶三人 書記壱人 会計壱人

一右同断ニ付正二位様・御簾中様七字御出門ニ而御参詣、御経中

御詰被遊候、正四位様・御前様御同様御詰被遊候

右同断ニ付天徳寺江御法事料御成規ニ因り左之通り御取扱相成

候

米五俵

命之者共天徳寺江参詣致候ニ付、御賄之義不斷院申談、天徳寺

二而引受取斗候ニ付、左之人數高仕出シ候事

中賄七拾五人前 外ニ菓子

米五俵

下賄式拾五人前

一右同断ニ付御香奠左之通被供之

御両君様より 金弐百疋ツヽ

金參百疋

不斷院

右御法事ニ付賄始彼是取扱之廉ヲ以被下之

一右同断ニ付正二位様御詠哥御祭文

維

明治六年太陽曆五月十日孫正二位松平慶永誠惶誠恐頓首百拜焚

香謹告大母松栄君靈尊歲序流易值十七年忌辰追憾往事蒼天罔極  
捧歌章以陳情志奠菓以慰靈魂

松栄君の十七年の忌によめりて

なき君の深き恵を思ひいてなげくあまりの袖のむら雨

十あまりのなゝとせをへしいにしへをしのふ涙に袖ハひちけり  
いにしへをとありかかりと忍ふれはいますかことき君か面影

正二位様 御花壺筒

正四位様 御菓子一台

金弐百疋 松平確堂様

清心院様

右同断ニ付御手備

金弐百疋

金弐百疋

一五月十一日

一交御肴壱折

右久我正三位様御代替りニ付、為御歎御両公様より被進之

同二年己巳五月十五日任民部官知事、同年七月八日任民部卿、  
同年八月十二日兼任大藏卿、同年同月二十五日任大学別当兼侍  
讀、同年九月二十六日叙正二位、同三年七月十三日被免本官兼  
侍讀、麝香間祇候

一五月十七日戸籍取調処江左之通御明細書御差出ニ相成候

堅曲尺九寸 橫二寸五分

宿所賜邸蛎壳町一丁目二番地

養祖父 従四位松平越前守齊承亡

祖父 従三位徳川大蔵卿治察亡

養父 正四位松平越前守齊善亡

父 従一位徳川右衛門督齊匡亡

第一大区十四小区華族

正四位松平茂昭養父隱居

生國武藏

正二位松平源慶永 明治六年五月四十四歳九ヶ月

天保九年戊戌十月二十日家督、同年十二月叙正四位下任左近衛  
權少将、嘉永四年辛亥十二月十六日任左近衛權中將、安政五年

戊午七月五日致仕、文久二年壬戌七月九日政事總裁職、同三年

癸亥三月廿八日辭職、元治元年甲子正月朔日參予、同年二月十

五日京都守護職、同年四月七日辭職、同年同月十一日任參議叙

正四位上、慶應三年丁卯十二月九日議定、明治元年戊辰正月十

七日内國事務總督、同年二月十九日更ニ内國事務局輔、同年閏  
四月廿二日更ニ議定、同年六月二十七日叙從二位任權中納言、

メ

一五月廿三日明廿四日於天徳寺豊仙院様百五拾回忌御法事御執行相  
成候

但シ夕刻より御經始ニ付、御令扶三人・書記壇人御寺詰罷越候

一五月廿四日豊仙院様御法事御執行ニ付、天徳寺江御參詣被遊候、  
但シ御經中御詰ハ不被遊候

正四位様より 御香奠金弐百疋

(正二位様)

御簾中様 御香奠金弐百疋

御代拂御家扶

(御前様)

一同断ニ付御法事料

米拾俵 天徳寺江

右之通御送与相成候

一五月三十日去ル廿六日太久保内務卿帰朝ニ付、本日皇太后宮・皇  
后宮江謁見御陪食被命、依而公にも被為召、左之御方々御同食相

成候

山階宮

大久保内務卿

中山從一位

御

付、請取歸御手許江差上候事

伝式樂隊樂ヲ奉<sup>ム</sup>人一名指揮 皇上玉座着御、皇大后宮・皇后宮御  
座着、御一同謁見、兩皇后宮樂隊奏樂一・三曲畢入御、侍從供  
玉食被召、至下江陽御膳、奏樂供御菓、至下二茶菓ヲ賜フ、畢

テ立札退去、宮内省工御札申上退散

詰申候

一六月十日青松院様御法事昨夕より御執行ニ付、正二位様・御簾中様七時御供揃ニ而御参詣、御経中御詰被遊候

成候

正四位様 御香奠 金式百正

正二位様 同

御簾中様 同 同百疋

御前様 同 同百疋

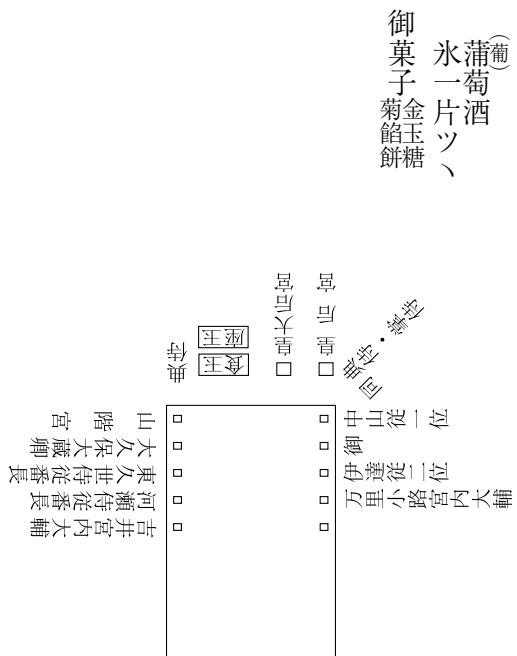
一 同断二付御法事料左之通被供之

一米拾俵 但合而拾俵被供御成規事之處、思召ヲ以別段五俵ヲ御増し

正一位様・御式所様より

一御附御法事料

金五百疋



一御香奠<sub>御相合ニテ</sub> 金弐百疋

明治六年六月十三日 東京府知事大久保一翁殿

第一大区十四小区  
蛎壳町一丁目二番地  
正二位松平慶永

一同日東京府より至急御呼出二付堀庸出頭候処、左之領收証御渡二  
相成候

皇城炎上二付献金

正二位松平慶永

正四位松平茂昭 納

証

一金弐千円

右正請取候也

宮内省  
出納課

明治六年六月九日

一同日正二位様為御墓參、福井表江被為入候御沙汰之旨被仰出之

一同断ニ付左之通被仰付之

(今般正二位様為御墓參福井表へ  
被為入候ニ付御供被仰付候事)

香西 成

蟹江太平

右同断

金拾円

正二位松平慶永

香西 成

蟹江太平

山沢 簡

同

山沢 簡

御直筆  
右福井表江供申付候ニ付、乍聊從手許令授与候事

一六月十三日正二位様為御墓參被為入候ニ付、左之通御願書御差出  
相成候

私儀為墓參敦賀県福井表江罷越度、依之日數六十日之間御暇被  
下置候様奉願上候、此段御執奏相願候也

一六月十八日正二位様本日福井表江御發駕被遊候、第五時三十分御  
供揃ニ而真崎御別館より御發車、新橋停車場七時發汽車江被為召、

但シ六月十五日至急御呼出二付堀庸出頭候処、左之通御附紙を  
以御指図相成候

願之通御聞届相成候、此旨相達候事

一六月十七日正二位様明十八日福井表江御出発ニ付、左之所々江御

届書御指出相成候

東京府 史官 宮内省 敦賀県序

今般願済之上、為墓參明十八日此表發途敦賀県福井表江罷越候、  
此段御届申候也

明治六年六月十七日

東京府知事大久保一翁殿

正二位松平慶永

香西 成

蟹江太平

山沢 簡

明治6年(1873)

八時三十分前神奈川駅江御着、夫ら御駕乗ニ相成候事

留守中東北往復書状可成丈細字嵩取申間敷事

一右同断ニ付正四位様新橋停車場江為御見送被為入、御簾中様より

御見立田代弘被遣候、御家令伊藤輔始御家從之面々神奈川駅迄御見送罷出候

御道中御泊附

大磯 六月十八日 箱根 同 十九日

吉原 同 廿日 鞠子 同 廿一日

日坂 同 廿二日 浜松 同 廿三日

御油 同 廿四日 鳴海 同 廿五日

尾越 同 廿六日 春照 同 廿七日

梁ヶ瀬 同 廿八日 今庄 同 廿九日

福井 同 卅日

一正二位様より御家扶江之御書下左之通

朝廷布告之事

東京府廻達正四位江之者留守中之分ハ一集シ、着後ニ真崎江可

差出候事

中山ら廻達者正二位江之ハ是亦留守中一集シ、着後真崎江可指

出候事

麝香間より之廻章前同断之事

留守中特命全權大使帰朝候ハヽ、早々北地江報知可指出事

往復書状之外木下十之介定便といへとも無用之品物并被進品等

一切廻シ無之事

但シ不得止儀有之、日用之品申福井より成始留守宅より要用之

品廻送等之儀ハ非此限

其外臨時之取斗非此限候事

万一田安其外被進物有之福井江廻し候様申来候共、一切廻送致間敷候事

但着後差出可申候事着迄難指置、腐敗等之妨碍ヲ生する恐れある品者、久人江申談室田へも申置所置可有之事

來月隆徳院殿正辰代拝可有之事

來八月十三日・十四日瑠池院一周忌修行之事

明治六年六月十八日

一六月廿四日先般御布令之階級并履歷御届、御両君様共東京府江御指出相成候

階級御届

明治六年九月廿六日 茂昭養父隱居 正二位松平慶永 明治六年六月  
被叙正三位

正二位松平茂昭隱居 明治六年六月  
四十四歳拾ヶ月

東京府貫属  
第一大区十四小区  
正四位松平茂昭隱居

華族

正二位松平慶永 錦之丞

明治六年六月  
四十四歳拾ヶ月

一慶応三年丁卯十二月九日議定被仰付候事

但忽忙之折柄御達書全文留記無之候事

一明治元年戊辰正月十七日左之通御達

一同年七月八日被任民部卿

但御達書全文留見当り兼候事

一同年八月十二日

松平大蔵大輔

内国事務總督被仰付候事

年月日

一同年二月十九日左之通御達

越前宰相

議定職内国事務局輔被仰付候事

年月

一同年閏四月廿一日辭議定

一同年同月廿二日更ニ議定被仰付候事

右宣下候事

但同斷全文留記無之事

一同年六月廿七日左之通御達

越前宰相

任權中納言叙從二位

右宣下候事

年月

一同二年己巳五月四日左之通御達

松平中納言

本官ヲ以テ行政官機務取扱兼勤被仰付候事

年月

一同三年庚午七月十三日左之通御達

松平民部卿

兼任大蔵卿

右宣下候事

一同年同月廿五日左之通御達

松平民部卿

任大学別当兼侍読

右宣下候事

年月

免民部卿兼大蔵卿

右宣下候事

年月

一同年九月廿六日被叙正二位、左之通御達

松平從二位慶永

大政復古之際ニ当リ勅ヲ奉シテ力ヲ皇室ニ尽シ、以テ今日ノ  
績ヲ贊成候段叡感不斜、仍賞其功位階一級ヲ被進候事

松平大蔵大輔

免本官兼侍読候事

年月

松平正二位

麝香間祇候被仰付候事

一同四年辛未七月十五日左之通御達

正二位松平慶永

皇上江

御内献進目録

皇后宮江

一御姿見鏡壹面 代百円

一御時計壹コロメートル 但鎖共 代五百七拾円一御遠目鏡壹シャツ 代七拾円

一御牡丹式組 代七拾壹円貳拾五銭

皇后宮江

一蒔絵御小簞笥壹 代百五拾円

一御書物六部壹箱 代拾兩貳步壹朱壹匁七分五厘

外箱長持其外御入用共

惣メ金千六拾兩壹步三朱六貫八拾四文

銀三百九拾壹匁貳分五厘

右拾八軒方割

御壹方分金五拾九円壹步五百九拾三文

右御入用代如斯

一七月十四日先般皇城炎上二付、麝香間御一統メタ左之品々御内献相成候ニ付、御入用代別紙御割合伊達様メタ御世話元御割合御廻シ相成候事  
御壹軒分御割合伊達様メタ御廻シ相成候事

一御小簞笥 一御姿見鏡

一御時計但鎖共

右三口各家所持之品故請取書無之

一御胴乱

一御遠目鏡

一御牡丹

右洋人請取書有之

メ

明治 6 年(1873)

一七月廿九日福井表去ル廿一日發飛脚着、正二位様益御機嫌能、去

ル廿六日福井表御發途可被遊旨申來り候

御泊附

蟹江太平  
山沢 簡

抱中間

御発駕七月廿六日 武生 七月廿六日

中河内七月廿七日 春照 七月廿八日

墨股 七月廿九日 宮 七月三十日

赤坂 七月卅一日 浜松 八月一日

島田 八月二日 興津 八月三日

沼津 八月四日 宮ノ下八月五日

藤沢 八月六日

御着 八月七日

土屋化遊  
本多七平  
高田利雄  
原 益雄  
小村 繢  
天谷五郎七

県地タチ御見送

今村源之助  
中野良助  
中島雄次  
石川潛右衛門

同所抱中間

彦藏

勘平

音藏

一八月三日正二位様昨夜藤沢駅御泊ニ而、神奈川より午後二時汽車江

着京可被遊旨、御用状を以申来り候、但シ御休泊前記之通

被為召、益御機嫌克午後四時真崎御邸江御着館被遊、奉恐悅候

但御馬車新橋停車場迄為御迎御指出、御家扶井上徹同所迄為御迎御指出相成候

御供帰京

香西 成

一八月七日正二位様御帰京ニ付、左之通御届相成候

右御供之面々并御待受御家扶・御家從之面々、今夕於御前御酒  
肴被下置候

私儀願済之上為墓參六月十八日爰元發途、敦賀県福井表江罷越候處、昨六日夕帰京仕候、此段御届申上候也

明治六年八月七日

正二位松平慶永

東京府

宮内省

敦賀県序出張所

○正二位様福井御滯在中御日記抜萃

一六月廿九日七時四分益御機嫌克福井御着被遊候

一御旧臣士・卒族各所御出迎、御泉水御邸迄御供致候

一御着之上、是迄御懇意并ニ御側向相勤候面々、御歎罷出候

一御三度御膳御懇意之面々献進致候

一今晚為御機嫌伺罷出候面々、夫々被為召御酒肴被下之

松平鷗客・本多釣月・中根雪江・秋田豊・平本松雲・毛受洪

・大井弥十郎・勝木十蔵・桑山十蔵・真杉一・中村市右衛門

・草尾一馬・高村高・毛利元蔵・加藤藤治・高田正

一六月三十日今朝九時御供揃御菩提寺惣御参詣、御歩行東光寺御

靈屋・御廟共、夫々孝顯寺江御参詣、御靈屋御拝後御廟御拝、  
孝顯寺様御廟御花御手備、運正寺御靈前淨光院様・彩雲院様・天梁院様・將悟院様  
・有寔院様・昇安院様・徳正院様以上御手備被遊候、雨降候ニ付御駕御廻し、是  
より御駕乗瑞源寺江御参詣被遊候

一今夕波釣月・中根雪江・大井弥十郎・高田正被為召、御夜喰御  
酒肴被下相成候

一七月一日九時御出門ニ而神明・愛宕足羽宮御社参被遊候

一七月二日運正寺天梁院様御靈前江御参詣被遊候

一七月三日八時前御出門ニ而永平寺御参詣、夫々御帰路松岡天竜  
寺江御参詣被遊候

一七月四日午後二時御出門ニ而新田神社御参拝、酒・米・魚・塩  
御備、御祭文御読誦有之、夫々愛宕招魂社江被為入、御手備同  
断・御祭文御読誦

故半井 保 故矢島禹年

右墓所江切花被下候事

夫々土居原町波釣月邸江御立寄被遊候、御供毛受洪・香西成・  
高村高・蟹江太平・釣月邸へ罷越候面々村田參事・長沢鷗客・

本多渓南・土屋化遊・大井弥十郎

右ニ付御酒肴・御飯等指上、一統御相伴被仰付候

一七月五日今夕左之面々被為召、御酒肴・御飯等被下置候

荻野窓入御断申上・静帰耕・大宮藤馬・千本東岫・土屋化遊・  
中村松濤・原晚翠・近藤雄藏・日比彥之丞・武田閑翠・井原悠  
鹿・高田三郎・岡部有溪御断申上・大関遊川・河合太郎大夫・  
林泉友・岡田静眠・浅見涼二・村田竜之進・荒川汝水・川村藤  
市郎・菱沼亀叟・猪子九十九・長崎基近・横井五百里・山野凌  
・長谷川源之丞・秋田露曉・鈴木準道・武田正規・山本新七・  
青木万貞・堀平太夫・小林嘯峰・大崎七太夫

一七月七日午前九時御出門二而安波賀社江御參詣、春日滝殿御  
參詣、吉田運吉方二而運吉社司御小弁當被召上、夫々松雲院江  
廟御拝被遊、御花・御菓子御手備被遊候

一七月六時御供揃二而左之面々被為召、御酒肴御料理被下之

荻野窓入・東風徐芳・菅沼靜帆・菅沼与市郎・海福南岡・土屋  
小六・梯左仲・田中勘介・山守東篁・吉田一学・八木寿・林忠  
由・加藤清十郎・波々伯部弥六・浅井権十郎

一七月六日今夕二時後御出門二而船橋川江被為入、千本久信・同

東岫・同貫一・出淵伝之丞・大谷遜・小村績・御酒肴差上之、  
会社・兵隊より鮓汁献上仕度旨申上二而、其日何茂川狩所猶ヲ  
以テ差出候、森田酒造家桜屋方ニ於テ御小弁當被召上、御乗舟  
二而叩キ川御覽、夫々一統並居所江被為入、隊長五人江御酒御  
手酌被成下、一同江丹釀四挺・鰯五拾把・小鯛三百七拾尾被下  
之、左之面々被召連候、長沢鷗客・本多釣月・毛受洪・大井弥  
十郎・高田正・高村高・有賀尚之助、被召連候御供香西成・蟹  
江太平・山沢簡罷出候

一七月九日午前七時御出門二而大安寺江御參詣、御靈前江御菓子  
御手備被遊、御廟之義ハ降雨ニ付香西成江御代拝被仰付、夫々  
四十谷村安達利兵・衛江農・酒造家御小休・岸水・御乗船九十九船  
主長谷川源之丞・三好喜十郎罷出居、御船中ニ而御小弁當被召  
上、三時後坂井港御着船、開明樓内田周平・区長・副長共罷出  
候

一七月十日午前十時御供揃二而桜谷神社御參詣、区長副・戸長権  
共罷出居、祠官村井取罷出居、同處ニ而御召替之上、右区長初  
御目見被仰付、村井取同断、御菓子・御茶差上之、夫より札場

半左衛門陶器製造御覽二相成、三時後御供揃御歩行道寒島渡辺

彦吉宅江御立寄、内田周平・内田曾平被為召、左之通被下之

御召御帷子

内田周平江

稿 帷子

内田曾平江

外二金武百疋為御挨拶被下之

一七月十二日午前十時十五分宿浦御立、御乗船二而御溯江、山形  
より御下船、御乗輿五時過御帰館被遊候

一

渡辺彦吉宅江被為入、諸処御覽、汐見町戸長副共罷出、御目見  
被仰付

(被為召)  
御菓子被下之

(近藤 懲  
田中和年)

御三度御膳之節、千本久信始御前ニ於テ御酒肴被下之、中根牛

介伺御機嫌罷出候

柘植 浩

菅谷的平

木谷藤右衛門

右被為召御席画被仰付、御内々清水芳・渡辺彦吉妻御目見被仰

付之

一七月十一日午前十一時御供揃二而森田三郎宅江御立寄、御二度

御膳被召上

上字判壹枚

森田三郎

大判 壱枚

同手代 青山新平

右之通獻上之

夫々御乗船二而中根雪江方江被為入御止宿、為御慰松山清五郎  
家伝火術御覽二入但シ無拠御聞ニ而御覽ニ不相成候得共、折角骨折心配候  
事故御酒毫斗被下之

一七月十三日七時御供揃二而運正寺江御參詣、今日淨光院様奉始

御歴代様御法事御執行、午前八時同十時二座御經中御詰被遊、  
午後將悟院様御十七回忌御法事一時三時二座御執行

但午後三時之御經ハ協合講社中々御手伝申上候

運正寺二於テ御二度御膳指上之、御經濟協合講世話方者江御意  
有之、御着坐之上毛受洪初御世話申上候者江別段御意有之候

一七月十四日三時御供揃二而御遊歩之御序、神宮寺町妙経寺支配  
善慶寺江御立寄、故橋本左内墓所江香花御手向被下、夫々大橋  
際神宮常夜灯御覽、駒屋羽江出頭御延見、夫々御舟町通長沢鷗  
客宅江奉饗請候二付被為入、御供毛受洪・静帰耕・高田正・香  
西成初三人酒井政衛・長崎千里・波釣月御召連相成候

一七月十九日午前十時御出門御遊歩之御序、多田善四郎方江御立  
寄、御茶・御菓子・御二度御膳指上之、夫々杉田無二介屋鋪裏

柴田修理進勝家社御拝、二時前御帰館

鶴卵  
御召御帷子

壹箱

多田善四郎

一羊羹

壹箱

鈴木重弘母

一御召御紋御帷子

駒屋羽江

雷箋

壹卷

同万助

右被下之

一七月廿一日今夕根来久良人・山野凌被為召、御酒肴被下置候

右者福井御滯在中之御用留より書抜候也

メ

一今夕元奥女中相勤候田生桃寿・西川桃水・酒井梅・篠原さち・

原督・市村さき・横山<sup>(マ)</sup>・波々伯部美代・戸田とゑ・埴原な

か等被為召、御酒肴被下置候

一七月廿日今夕六時揃左之面々被為召御酒肴被下之

猶元・酒井嘉多志・山県昌・芦田源十郎・岡部長・大谷丹下・

波渓南・田中溪疑・白石小十郎・比企左門・小林直記・加藤常

之助・久世久・堀一二・真田源五郎・井戸惣三郎・生駒彦太郎

・数賀山郡平・沢田四郎平・周防謙介・林常盤・斎藤秋雄・久

野武雄・水野荒次郎・下山確介・高久官太・田中<sup>(マ)</sup>・奥村桐

之丞・田辺幾平・森豊吉・斎藤鉄次郎・玉村与八郎・中川廉蔵

・出淵肇・鈴木重弘・高村新造・勝山焉・今立春翠・柄田駒之

助・林包武・小倉豊・市橋環藏・村野達雄・渥美無手二・尾崎

涼・真木智・町田静・津保知良・勝木儀一・林左治衛・鈴木政

太郎・野村実済・岡規・井原立二・尾崎茂左衛門・大谷直

メ

御四方様より

御香奐 金百疋ツ、

御法事料 米式俵近來之御成規

一二三盆白砂糖 壱折

故連伝兵衛妹

別段 米式俵 御備

一同断ニ付正二位様・御簾中様より御附御法事有之候

御附御法事料 金五百疋

悦奉申上候

岩倉右兵衛督殿

交御看壹折

右者一昨十三日御帰朝ニ付、兩公より為御歎以御使者被進之

一八月廿四日正四位様・御両所様本日より相州湯本温泉江御湯治被為

入候ニ付、正二位様御留守御心得被遊候条、御届書御指出ニ相成候

第壹大区十四小区  
蛎壳町壹丁目二番地  
華族隱居

正二位松平慶永印

今般私儀願済ニ而相州湯本温泉湯治留守中、前書隱居慶永留守

中御用之儀為相心得候、此段御届申上候也

第壹大区拾四小区  
蛎壳町壹丁目二番地  
正四位松平茂昭印

明治六年八月廿四日  
華族 正四位松平茂昭

東京府知事大久保一翁殿

一九月(マ) 権典事葉室光子殿分娩、皇子降誕之処、即刻薨御之段御  
布達有之

御家附属 杉田伊之助

一九月十日正四位様・御前様第三時横浜表御発車、四時三十分箱根

表々益御機嫌克御帰邸被遊候、正二位様・御式所様より為御迎、

蟹江太平同所迄御使被仰付候

メ

第五大区九小区  
下谷坂本町武丁目一番地  
伊藤かの娘とく

右御誕生様御乳持ニ被召抱候

メ

一九月十五日正二位様御側仕ふし、午後第七時三十分分娩、御男子  
様御誕生奉恐悦候、依之御家扶初御家從一統真崎御邸江罷出、恐

明治6年(1873)

一九月廿一日御誕生様江御名六之助様と被進、御使御家令伊藤輔被仰付候

右被進之

御名目録 御肴 御産衣

一御誕生様御名奉称六之助様与諸向江被仰出候

一同日六之助様御簾中様御養二被仰出候

六之助様御乳持とく

右御暇被下候

埼玉県下式合半郡  
(須) 高次村農 清水清助娘はな

東京府知事大久保一翁殿  
忌十日 明治六年十月六日迄  
同月廿五日迄

服三十日 明治六年十一月四日迄

明治六年十月六日 第壱大区拾四小区  
蛎壳町壱丁目二番地  
正四位松平茂昭

右同断ニ付、御両君御忌服被為請候ニ付、東京府江御届御指出二相成候

從五位阿部正桓養祖母病氣之処、養生不相叶昨六日午後七時死

去仕候、依之養父隱居慶永儀養娘之統ニ付、定式左之通忌服為

請申候、此段御届申候也

一十月六日清心院様御儀御病氣之処次第二御持重り、余程之御容躰  
二被為入候ニ付、即刻御家扶伊藤輔・井上徹本所石原御邸江被遣、  
正三位様午後四時頃御供揃ニ而御同邸江被為入、為御見廻田代弘  
・山本謙御医師被遣奉拝診候処、追々御疲勞被為増候旨ニ而、御案  
思不啻思召候

一右同断ニ付、御家從之面々來ル十二日迄高声可相慎、猶御忌掛  
り中相心得可罷在旨、御布達有之候

一十月八日清心院様御出棺之儀、明九日淺草西福寺中墓地借受、御  
神葬ニ相成候旨為御知有之候  
但清心院様章姫命ト御追謚被為存候事

一十月十四日

御附蟹江太平

一十月七日清心院様御事御病氣御養生無御叶、昨六日午後七時四十  
分御卒去被遊候旨、為御知有之奉恐入候、依之即刻御家扶三人石  
原御邸江被遣候

御都合も有之ニ付、真崎御邸近傍ニ於テ御小屋拝借被仰付候

明治6年(1873)

一十月十八日

御附佐野 久

御都合も有之二付、元御貸被下候隣御小屋江御振替被成下候事  
但シ御用弁御都合ニ寄り、御邸<sup>真</sup>内移住之事ニ被仰付候也

十月三十日

池田侯  
慶徳

候、左之通ニ付及御廻達候也

御一列御不快御不參御届、式部寮又ハ同寮赤坂出張江御届可然

哉御尋承候、赤坂出張式部寮江御届可然候也

一十月廿四日御本邸ニ而扱所江左之通御届ニ相成候

來十一月三日天長節ニ付、隱居慶永儀當時麝香間詰ニ付、別紙  
之通式部頭殿<sup>タ</sup>依御布達參省候間、東京府江名刺不指出心得ニ  
候、此段御届申上候也

明治六年十月四日 松平茂昭内伊藤 輔

戸長御中

一同日左之通被仰付候

第壹大区五小区品川町老丁目 平野金次郎方同居  
中村由松

右之者御膳所御料理向之方江御雇入候

但年給五拾五円

一同日正二位様麝香間御拝命之年月、東京府江御届指出候様御達御

届書堀庸持參候処、請付所岩瀬某落手相成候

一十月三十日左之通御廻達

各位益御勇健奉賀候、拵昨日御示談御座候ニ付、坊城殿江問合

止宿人別御届

華族正二位松平慶永  
明治六年十一月四十五歳三ヶ月

一一月十五日真崎戸籍扱所江左之通御届相成候

一一月十一日六之助様御儀正四位様思召ニ而、末々御家督御相続  
之御治定被仰出、御家從之面々江も御達相成候

五日間ニ而、為天氣伺參朝候様被仰出候

一一月十三日皇女御誕生被為在候処、直ニ薨去御停止承候日より

明治 6 年(1873)

同家婢

正二位様  
御手許算者被仰付

大森豊治

明治六年十一月廿四日

東京府知事大久保一翁殿

正四位松平茂昭

一十一月十六日

正四位様

御看壱折

六之助様

右者御繼嗣御治定ニ付被進之  
六之助様  
正四位様江 同

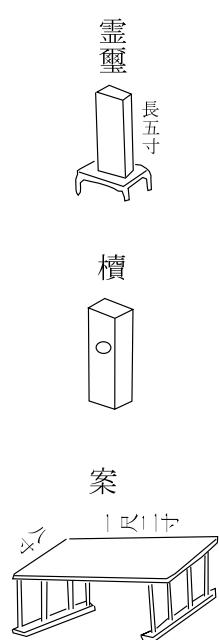
右者御同様被進之

一六之助様御遺骸天徳寺へ御埋葬被仰出候ニ付、不断院呼出其  
段御達ニ相成候

一十一月十八日戸籍方より布達ニ付、御両君様御明細書三枚宛東京府  
江御差出相成候

一十一月廿四日六之助様御事、昨夕四時頃俄二驚風之御症御発シ、  
種々御療養御加之処、夜九時頃より些シク御緩慢之御容躰ニ被為在  
候処、亦復十二時比より御發動、次第二御危篤之御場合ニ被為至、  
今廿四日午前第七時終ニ御卒去被遊重々奉恐入候、七歳御未満ニ  
付正三位様三日御遠慮、正四位様一日御遠慮被遊候、依之東京府  
始ヘ御届書御指出ニ相成候

同苗正二位慶永男六之助儀病氣之処、養生不相叶今廿四日致病  
死候、七歳未満之儀ニ付、正二位慶永儀今廿四日より廿六日迄日  
数三日之間遠慮引籠罷在候、此段御届申上候也



一内衣 冬ハ裏アルヘシ、タチヌイノマヽ常ノ如ク  
一襯衣 長ハ膝トヒトシク

六之助様御病氣之処、御養生不被為叶、今廿四日午前七  
時御卒去被遊候、依之今廿四日より廿六日迄御家從之面々末々  
迄鳴物・高声被停止候事

但致懸り候普請之義ハ不苦、尤御葬送相濟候迄ハ銘々可有  
心得事

右同断ニ付御邸中御家從之面々戸触左之通

一布帶 布ヲタヽミテ作

一衾帳 イツレモ三幅、長六尺其人ニ応スヘシ

一野草衣 インカタビラ  
ホトコ 四幅長八尺夏冬裏ナシ

一櫛 材松ノ服アルヲヨシトス、二三寸底ナシ

一棺 其人ニ応シ作ル、材ハ被ヲ用ユ

一枕 桐ヲ用ユ長サハ棺ノ広サニ従フ

一充囊 布ニテ囊ノ如ク

一帯 大キサハ棺ニ従フ

一大輦 ヒツキヨン 俗ニレンタイ

一凳子 高サ一尺 二脚

一幡

一



一



一六之助様御事

一右御卒去ニ付左之御方々様江為御知相成候  
稚梅彦命ト奉称候旨被仰出候事、依之御家従之面々江御触

示相成候事

一右御卒去ニ付左之御方々様江為御知相成候  
御本邸

一細川様 田安様 鍋島様 立花様 津山様

一雲州様 明石様 峰姫様 細川様 清崎様 確堂様

一鍋島  
筆姫様

一鳴呼痛乃稚梅彦与此二魂ヲ移志天平計久我此憐武心乎受給閉

十一月廿五日稚梅彦命明廿六日午後一時天德寺江御送棺被為在候

旨被仰出、依之御家従之面々江布達、且又左之品々御用ニ付御支

度候事

一名簾 壱本 一提灯 八張

一松明 八本 一榾七尺斗 壱本五色結懸

一傘 壱本 一白杖 壱本

一棺但桐枕添 一墓誌 壱本

一靈璽 壱個 一八足机 四脚内一尺五寸二  
三尺二

一高八足机 壱脚 一卒櫃 壱個

一三宝 拾五 一酒瓶 武対

一大小 三十枚 一灯 二本

一ムシロ 武十枚 一赤白簾 四本

メ

一同日今晚九時稚梅彦命御納棺御式被為行、御方々様御棺拝之後、

御家従之面々并奥女中一統御棺拝被仰付候

誌版正銅一步板寸法曲尺立八寸五步

君名六之助正二位慶永卿男、母細川氏実糟谷氏之出也、明治六年九月十五日生、同年十一月廿四日病殮葬于天德寺

一正二位様御吊文

明治6年(1873)

一十一月廿六日今午前一時、稚梅彦命御行列揃二而、愛宕下天徳寺江御葬送相成候 ※

※ (ゴム印)  
〔大正十五年七月品川  
海晏寺墓地ニ改葬ス〕

右同断ニ付御先詰堀庸・鱸松江等罷越御支度等御準備、第五時天徳寺江御着棺、夫々御葬儀相始り、畢而午後第九時御埋棺無

御滯相済候事

御供

御供

御行列

御先警固一人 御名旗一人 神官 椅二人 高張一人  
籌一人 白張提灯一人 椅一人 赤旗一人 松明一人 神官  
御近習 御棺 人足 白杖一人 高張一人 白旗一人  
御近習 同 白杖一人 高張一人 白旗一人  
御代拝 挑箱 目籠 御館入町人

正三位様香西成 御簾中様白井久人 正四位様中根新

御前様中根新

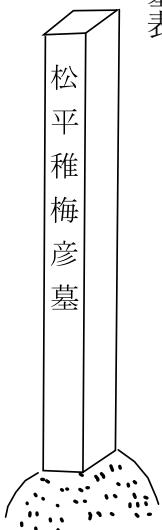
御棺脇 白井久人 土井貫弥 中根 新

一正三位様御誄辞

嗚呼悲哀乃稚梅彦仁告麻久白須汝此顯世越退里天昨晩乎悲々美津歎々幾津  
柩納天今日波葬里日仁成多礼午乃時仁住駒志隅田川乃庵乎立出  
西窪乃愛宕乃山濃麓乃祖母濃命乃墓乃側仁向比汝乃顏  
乎現仁見留如久对面天別礼白須從今汝我朝夕仁憂愁武心乎慰米鳴呼

哀乃汝父正三位松平慶永告滿白須

御墓表



一十一月廿九日稚梅彦命明三十日初七日ニ被為當候ニ付、今夕より明

朝迄於天徳寺御法事御執行、依之御家扶老人・御家從老人御寺詰

罷越候

明治 6 年(1873)

一十一月三十日昨夕より今朝迄有光院様御法事於天徳寺御執行、正二

位様午前九時御供揃ニ而御參詣、御家扶・御家從并奥向とも御寺

詰罷越候

右同断ニ付

御両公様

御香奠 金弐百疋宛

御簾中様・午前様

同 金百疋宛

右同断ニ付

御法事料 米三俵

外ニ武儀 思召ニ而被供之

御七々日御経料

金壹円ツヽ

合而七円也

一十二月八日左之通蛎壳町御邸より御届書御指出相成候、来ル一月六

日新年宴会被為行候ニ付、隠居慶永儀仮皇居江参賀申上候様、式

部頭殿より兼而御達有之ニ付、東京府江者罷出不申候、此段御届申

上候也

第一大区拾四小区  
松平茂昭内

明治六年十二月

東京府知事大久保一翁殿

伊藤 輔

御名 殿  
従一位徳川慶勝殿  
従一位九条道孝殿  
従二位伊達宗城殿  
従四位細川護久殿

一十二月九日今晚一時比より神田祝町より出火之処、北風烈敷蛎壳町

御邸追々御危難之御場合ニ而、已ニ御貸長屋不残御焼失ニ相成候

得共、御屋形向ハ御別条無之奉恐悦候、御方々様ニも御披キ迄ニ

ハ不被為至候、正三位様ニ者真崎御邸より為御尋被為入候

一十二月十四日来ル十九日頃主上真崎御邸江行幸被為在候哉之御内

沙汰有之趣、堤少丞より申来候ニ付、同人江都而問合之上御用意  
被為在候

但過日山内殿江臨幸被為在候儀ニ付、右御振合御家從堀庸江被  
仰付為取調被遣候

一十二月十五日左之通御廻達御到来

来ル十七日午前第七時廿分御出門、横須賀江行幸・行啓被仰出  
候ニ付而ハ、同八時迄ニ御列外新橋ステーション江出頭可致旨

被仰出候、此段申入候也

六年十二月十二日

宮内卿徳大寺実則

従一位徳川慶勝殿  
従一位九条道孝殿

従二位伊達宗城殿  
従四位細川護久殿

追而雨天延引之事

一還御後主人即刻參朝、宮内省江御礼申上之  
右之通ニ候事

一十二月十七日今朝第六時御供揃ニ而正二位様新橋ステーション江

被為入、御列外ニ而横須賀行幸御供奉御勤被遊、翌十八日午後四時過御帰邸被遊候、御供蟹江太平出勤致候

一真崎御邸江内匠課之者兩人人足五人召連罷越、表御座鋪・御椽側外江御仮御廁幕張ニ而出来候事

一十二月十八日過日山内殿御邸江行幸被為在候節之御振合、為問調再度堀庸被遣候処、左之ケ条写取復命候事

一主人小礼服御送迎共門外迄行幸之節手続

一主人小礼服御送迎共門外迄

一家令・家扶・家從共小礼服門内両側江出ル

一座上新ニ白綿布或ハ洋物之敷物ヲシク

一主人并ニ家族老幼一列ニ被召出、此時定レル式ナシ、婦人ハ

紋付着用

一獻物

一菓子一折 生魚一折 鴨五番

一御膳部初御當用之御品一切、内膳司雜掌課為御持ニ付用意ナシ

一御廁内課ヨリ同断

一諸官員馳走

一菓子 飯折 洋酒 茶

一給仕者家從小礼服ニ而相勤、家丁平服座上關係ナシ

御請

六年十二月十九日

宮内卿徳大寺実則

正二位松平慶永殿

今十九日午前第九時御出門、隅田川筋橋場辺江行幸被仰出候ニ付、右為御小休慶永邸江臨御被為在候旨被仰下、謹畏奉候也

六年十二月十九日

正二位松平慶永

宮内卿徳大寺実則殿

一右同断ニ付正四位様・御前様・信次郎様第六時御供揃ニ而、真

崎御邸江被為入候事

一右同断ニ付御家扶始御家從之面々、小礼服着用御同所江罷越候

事

メ

一還御後為御礼即刻御供揃ニ而宮内省江御參被遊候事

## 供奉

一 同日第十時比橋場渡船場角三条殿御邸江臨御、夫々御同処橋詰より御船上り被遊、正二位様御召・正四位様御同召御上り場迄御出迎、午前第十一時真崎御邸江着御被為在、表御座敷ニ於て御簾中様御紋付・御前様同・信次郎様御召被拝龍顔、引続御二度御膳御用意、内膳司之者其前出役、御支度出来ニ而被為召上、御重代御太刀・御重器之品為御慰天覽被為在、且左之品々御進献、徳大寺殿披露之

御菓子壹折

(長杉折式重箱)

鯉 武喉

(但御邸傍百姓文右衛門へ被仰付  
御邸前隅田川ニ而漁獵之品)

鱈 壱桶

(但稻荷堀御邸池ニ而  
漁獵之品)

但御進献之上御披露済宮内省江廻呈、高橋太市指添罷越

外二

鴨三番

小鳥拾羽

鯉 武喉

御膳御用献上内膳司江渡ス

右同断ニ付左之御方々御先詰并ニ供奉人員、洋酒并折詰弁当差

出之

一 午後二時三十分還御被為在候ニ付、正二位様・正四位様・信次郎様御乗船場迄御見送り被遊候事、御家扶・御家從之面々入御之節之通、御門前江罷出候事

○ 印上折	○ 輔 壱人
● 印中折	○ 侍従長壣人
△ 印下折	○ 大小丞之内壣人
● 印中折 ビール	○ 侍従 武人
○ 九等出仕壣人	○ 九等出仕壣人
○ ● 侍医御薬室武人	○ ● 侍医御薬室武人
● 内膳課壣人	● 内膳課壣人
● 等外 壱人	● 等外 壱人
● 雜掌 四人	● 雜掌 四人
○ 御先詰	○ 御先詰
○ 丞 壱人	○ 丞 壱人
○ 侍従 武人	○ 侍従 武人
● 錄 壱人	● 錄 壱人
● 等外 武人	● 等外 武人
● 御雇出仕壣人	● 御雇出仕壣人
● 東京府十等出仕壇人	● 東京府十等出仕壇人
● 内匠課壇人	● 内匠課壇人
● 等外 壱人	● 等外 壱人

△ 大工 壱人  
△ 人足 六人

(別紙御邸御普請御用出精相勤候二付  
一桐御紋付木綿

近江屋伝左衛門

● 調度課壱人

別紙 金三百疋

● 等外 壱人

右表二而御取扱相成候

△ 夫卒拾四人

(度々御出生被為在且年來出精ニ付  
格別之訳を以年々金三拾円ツ、被下候事

御中蘭 ふち

● 外御船士官拾弐人

但益暮兩度ニ御授与之事

△ 水夫弐拾人

明治七甲戌年

一臨御無御滯被為済候為御祝儀、表御座之間ニ於テ正二位様・正四位様・御簾中様・御前様・信次郎様御椅子ニ而、御家扶初御家從・女中向江一列ニ而御料理・御酒等頂戴被仰付、其節正二位様御祝詞左之通御朗讀

今日天皇陛下辱クモ此邸ニ臨御シ玉フ、臣慶永驚惶感泣ノ至ニ堪ヘス、依而聊宴ヲ開テ会同ス、共二十分盛恩優渥ニ浴シテ、歡喜ヲ尽サンコトヲ庶幾ス

明治六年十二月十九日

御名

一一月十日有光院様御四十九日ニ付、天徳寺江御代拝香西成被仰付

遊候

一一月三日元始祭ニ付賢所神殿江御参拝被遊候但御手狹ニ付惣族方ハ御参拝無之

一十二月廿九日

(真崎御邸御普請出精相勤候ニ付  
御目録之通被下之

鱸 松江

御目録 金七百疋

(真崎御邸御普請出精相勤候ニ付  
被下候事

杉田伊之助

御四方様ヲ御香奐金百疋ツ、  
右被供之

一月十二日清心院様御百ヶ日御相当二付、西福寺江御代拝、奥女中二而駒野被仰付、御香奨金貳百疋被供之

暴人御負傷被為在候条、宮内省當直岩佐純乃申上二相成候

一月十五日今午後七時過岩倉右府公御退朝之節、赤坂喰違二而為

衛門殿御出張ニ而、御取調相成候ニ付尚又取調候処、家丁今川新助と申者所持之口靴貳足、去ル十二月比紛失候段申出候、右者是迄折々犬狐之業ニ而紛失候義も儘之有ニ付、右様之儀与相心得穿鑿中未夕御届不仕段申出候ニ付、此段御届申上候

七年二月四日

御名内  
堀 庸

東京裁判所御中

一月十六日前記之儀ニ付、御両公様乃岩倉殿江御見舞御使者堀庸被仰付候

一月廿九日左之通御届書御指出相成候

一二月十三日午前八時御出門池田様・伊達様御同車、岩倉殿・三条殿江為御用談被為入、夫乃島津殿御邸江被為入、夫乃御哥会ニ付

被為召御參朝、御吸物・御酒御頂戴、外ニ御短冊壹葉御拝領、午後第六時御帰館

明三十一日横浜瓦斯灯点検ニ付、為見物同姓正二位慶永同処江罷越、同日一泊為仕度此段御届申上候以上

一月三十日正二位様横浜表江瓦斯為御見物被為入、御一泊之上翌

一二月十四日東京府戸籍方ヨリ正二位様御令扶之内壹人出頭候様御呼出ニ付、堀庸出頭候處、御書付左之通御達相成候事

正二位松平慶永

復古功臣事蹟編集候ニ付、別紙例則ニ照準シ一身経歴ヲ編次シ、

正副二本可差出、此旨相達候事

明治七年二月十四日 太政大臣三条実美

編集例則

内  
壹足船來コム仕立  
壹足日本製

右者今般盜賊御召捕之処、橋場町地方五番地同姓慶永止宿邸江立入、盜取候段及白状候ニ付、紛失ニ相違無之候哉、近藤十右

通称初何某後何某又ハ何ト号ス等詳記スヘシ、但シ壬申九

一苗字姓名実名

月百四十九号布告以後、通称名乗廢棄ノ分ハ朱ノ□形ヲ加

明治七年二月

正院歴史課

ヘ弁別スヘシ

一郷貫食禄

何府貫属元堂上諸侯庶人元何領管下国郡村名等ヲ詳ニスヘシ

一生誕年齢

年号支干日月何府県何国郡ニ何地ニ生ル又明治七年一月齡

幾年幾月

一世系

祖父何某父母何某或ハ某ノ幾男某兄弟

一履歴

復古前後ヲ論セス、總シテ国事ニ干渉シ時務ニ鞅掌セシ、凡其一身難苦経歷ノ事蹟ヨリ、官位・職務・祇役・征戰・褒貶・進退或ハ特命或ハ職掌ニ依リ担当施設セシ事務ノ顛末、及ヒ現今奉職ノ有無ニ至ルマテ、一切年月方所ヲ詳記

被成候事

シ、宣旨・建議・達書・策文等ハ原文ヲ掲ケ、次第編集シ事理ノ本末貫通理解シ易キヲ要ス

一同日元尾州ニ而貞慎院様御三回忌御法事御執行被為在ニ付、正一位様午前九時御出門ニ而、天徳寺江御參詣被遊候

一已ニ死去致シ候輩ハ親戚朋友ノ者其事蹟ヲ編集シ、死葬ノ年月方所碑表ヲ記シ、遺著類ノ其國事及其経歷・事蹟ニ関涉スルモノハ錄上スヘシ

一本年六月ヲ期限トシテ在官ノ者ハ史官、非職ノ者ハ其本管序ヘ差出スヘシ

一二月十八日左之通

本日東京府ニ於テ相達候復古履歴書差出候事件ニ付、本課も申達度義有之候間、明十九日午前十時家令或ハ心得候者一名被指出度候也

七年二月十八日

歴史課長 従五位長松 幹

松平正二位殿

一三月三日有光院様御百ヶ日御法事御執行ニ付、兩大奥ニ而天徳寺為御參相成

御各殿より御花壇付・御菓子壇台

右被供之

一三月四日午前十時御出門二而、東本願寺江為御集会被為入  
但シ過日來御同族方被仰合御集会、御族中之儀ニ付御評議向も  
被為在候趣、爾來每々御集会有之候得共毎次略之、曰ク華族会  
館建築計画ニ係ル也

一三月十七日左之御届書御差出ニ相成候

復古功臣事蹟御編集ニ付、猶粗漏之廉也有之候ハヽ、猶又取調  
早々指出候様御沙汰之趣、右者先般差出候家系・事蹟・履歴等  
詳細取調指出候外、別段遺編之廉も無御坐候、此段御届申上候  
也

明治七年三月十七日

正三位松平慶永

同

金四百貳拾円

メ

信次郎様

御簾中様

御前様

同

金七百円ツヽ

壹年千五拾円宛

正四位様  
御分量定額

今日御直書ヲ以被仰出候通、御手許御分量金御減少相成候ニ  
付、自今猶以御主意厚相心得候様被仰出候事

明治七年三月

間、其段銘々可相心得候事

一三月三十日別紙之通被仰出候ニ付、御家扶詰処ニ於て御家從一統  
江演達相成候  
御直書写

去ル壬申家政改革家從之者多分減員、家扶始給料も格別減來  
候処、又々今般祿稅被仰出候ニ付而者、此上釐正も不致候半  
而ハ量制も相立兼候次第、依而手許定額ヲ始今一層減省、猶  
更簡易質素ニ基き度、先々給料も順次減削、別紙之通申付候

月給  
一金貳拾八円

伊藤輔

外二三円六拾七錢三厘三毛從前御手當三分一被下

一金貳拾五円ツヽ

(香西成

外二三円六拾七錢三厘三毛同断

(井上徹

一金拾七円五拾錢宛

(中根新

外二三円六拾錢壹厘七毛 同断

田代弘

一金拾四円宛	外二 武円七拾五錢	同	一金拾四円宛	外二 壱円三歩壹朱壹匁貳分五厘
同	一金拾円五拾錢	同断	同	一金四円三歩三朱壹匁貳分五厘ツヽらく
外二 武円五拾錢	同断	同	外二 壱兩貳歩壹朱五分八厘	同断
一金拾壹円九拾錢	同断	山沢 簡	堀 庸	堀 庸
外二 武円七拾錢	同断	同	一金三円拾錢四厘ツヽ	蟹江太平
同	一金八円四拾錢ツヽ	同断	同	澤木祿平
外二 三円	同断	同	一金四円三歩三朱壹匁貳分五厘ツヽ	白井久人
同	一金六円三拾錢ツヽ	同断	外二 壱兩貳歩壹朱五分八厘	外二 壱兩貳歩壹朱五分八厘
外二 武円三拾三錢三厘三毛同断	高橋太市 大森豊治 天谷五郎七 杉田伊之助	鱸 松江 佐野 久	一金四円三歩三朱壹匁貳分五厘	一金四円三歩三朱壹匁貳分五厘
同	一金四円九拾錢	同断	外二 壱円壹朱壹匁貳分五厘	外二 壱円壹朱壹匁貳分五厘
外二 武円四錢八毛	同断	同断無減被下	一金四円三歩三朱壹匁貳分五厘	一金四円三歩三朱壹匁貳分五厘
同	一金貳円九拾五錢	抱中間壹人分	田代 弘	田代 弘
同	一金七円三歩三朱三匁貳分五厘	室田	はる くめ	はる くめ
外二 武円壹歩三朱貳匁七分五厘	從前御手當三分二被下	右者今般警視庁江御雇被仰付候ニ付、御家從之儀ハ御免被成候事 但警視安寧局江御雇相成候事	まき もみ ひて ふし たき	まき もみ ひて ふし たき
一金五円貳歩貳朱壹匁七分五厘	駒野	一四月八日左之通御届御指出ニ相成候	京都府貫属士族 木村重辰	京都府貫属士族 木村重辰

右者今般警視庁江御雇被仰付候ニ付、御家從之儀ハ御免被成候事  
但警視安寧局江御雇相成候事

一四月八日左之通御届御指出ニ相成候

京都府貫属士族  
木村重辰

右当分家徒ニ御借受申度、御指支之儀も無御坐候ハヽ、此段相  
願候也

明治七年四月八日

第壹大区十四小区  
華族

正四位松平茂昭

一五月五日左之通被仰付之  
御家徒其儘正二位様臨時御用向是迄之通相心得可申、依而月々  
金七円ツヽ被下候事

東京府知事大久保一翁殿

但シ木村重辰儀ハ青松院様御縁故有之候也

一五月十八日正二位様午前第九時御出門、伊達宗城様御同車、永田  
町華族会館江御集会被遊候本日会館へ初而  
御集会

但シ四月十六日之御廻章ニ

一同日今般越前坂井港之者一同ヨリ正二位様御寿像御寄附願申上、  
為御迎柏谷沙庭・村井収等島雪斉工彫同伴出京、何茂本日御両邸江  
出頭御機嫌相伺候

正二位様江

一奉書紬

坂井港一統

正四位様江

一御菓子壺折

柏谷沙庭

右献上之

一四月廿二日

田代 弘

四月十六日

壬生基修

今般警視庁出仕ニ付御家徒御差戻、県庁江御達二八相成候ハ共、

真崎御兩方様御用向者是迄之通御頼被成度、依之月々金拾円宛

御送与被成候事

一五月廿八日皇后宮御誕辰ニ付御前十時御参朝、御慶賀被仰上候

御名殿外御三名

中山忠能

直談候処、即今引払ニハ難至候得共、不用之場所貸渡之儀ハ聊  
無指支、何時ニ而も可引渡旨ニ候間、去ル十三日受取候、孰れ  
不遠引払ニ可相成、其上右屋敷一円押借可願立心得ニ候、此段  
為御心得申入候、猶委細之儀ハ押面申入候、仍如此候也

明治7年(1874)

一五月三十一日東照宮御大祭ニ付兩公上野御宮江御參拝

玉串料金貳百疋宛

右被供之

一六月一日日本日永田町華族會館ニ於テ、役員投票御執行ニ付、兩公御參集被為在候

一六月二日淨光院様御忌月ニ付、天德寺江御參詣被遊候

柏餅壹折  
枇杷壹台献上之

芝浜松町中村專助  
芝神明前山中市兵衛

右者芝東照宮營繕之儀ニ付願之筋有之、真崎御邸江出頭其旨趣  
陳上候事

一七月十一日正二位様・御簾中様天德寺江御參詣被遊候、御簾中様  
當年初而御參詣被遊候ニ付左之通被供、且被下之

御尊靈様方江 金貳百疋

本尊江

同貳百疋

方丈江

同三百疋

役僧江

同貳百疋

不斷院江

一六月五日上杉茂憲殿御祖母昌寿院様御儀、兼而御病氣之處御養生  
無御叶御卒去被成候、右者御簾中様実御叔母御統ニ付、御定式御  
忌服被為請候、直ニ為御悔御手許使者御指出ニ相成候、尚御兩公  
ノも翌日御使者御指出相成候、同断ニ付左之通御布達ニ相成候

従四位上杉茂憲殿御祖母昌寿院様御儀、兼而御病氣之處御養生  
(昌寿)

無御叶、昨五日午後二時御卒去被成候、右者御簾中様ニ於テ御  
実御叔母御統柄ヲ以、十日・三十日御定式之御忌服被為請候、

依之御家従之面々末々迄昨五日迄來ル十日迄六日之間、鳴物・  
高声可致遠慮候事

但シ致懸リ候普請之儀ハ不苦候事

御機嫌候事

第十時後御小座敷江被為召、於天前被加御人數如左

有栖川熾仁親王 万里小路宮内大輔 東久世侍從長

明治七年六月 日

御家扶

三条西正二位 松平正二位 毛利従二位

一六月廿五日

御探題

船納涼

雲晴れてくまなき月の桂川すゝしさあかぬ船遊かな

色紙江御認御詠進

御製及詠進之短冊拝見被仰付

御陪食被仰付候人員如左

有栖川熾仁親王 山階晃親王 万里小路宮内大輔

東久世侍従長 杉宮内少輔 斎藤従四位利行

三条西正二位季知 松平正二位慶永 伊達従二位宗城

毛利従三位元徳 細川従四位護久

午後第一時御陪食、畢而御礼申上、猶又宮内省江御礼申上退下

一七月三十一日津軽勝境院様御一周忌二付被供之

一金百疋 御花料

(真瓜)

一壺

一八月十三日阿部様二而寛恭院様式十三回忌御相当二付、於松平西

福寺奥方様思召を以、無屹度御法事御執行之旨、奥向々為御知有

之候ニ付、正二位様・正四位様御參詣被遊候

但シ阿部様近來御歴代神祭ニ御改式ニ相成候

一金貳百疋 壱筒ツ、被供之

一御花 壱筒ツ、被供之

但シ大奥ニ而室田・駒野御代拝被仰付候御簾中様・御前様  
御代拝ニ候事

一八月廿二日瑠池院様三回御忌御相当二付、昨廿一日より今朝迄於天

徳寺御法事御執行相成候ニ付、本日午前第六時御出門正四位様御  
参詣、同七時御出門正二位様御参詣被遊候、昨廿一日夕御寺詰井  
上徹・天谷五郎七、本日同断伊藤輔・鱸松江・高橋太一并ニ両大  
奥女中頭罷出候、右ニ付同所に於テ御賄被下置候

一御法事料 米参俵 御定之通

一御香奠 御四方様 金百疋ツ、

一同断ニ付 正三位様・御簾中様ル御添御法事御執行ニ付、左

之通被供之

一御添御法事料 金五百疋

一御香奠 金百疋

一御添御法事料 金五百疋

一御香奠 金百疋

一九月十九日元津山様ニ而、涼晴院様式十三回御忌御相当ニ付、於

天徳寺御法事御執行有之、左之通被供之

兩公ル

一御香奠 金貳百疋

一同断ニ付正二位様午前九時御出門御参詣被遊候

一御花壹対 思召を以被供之

一九月廿二日本日於御学問所各國公使御饗應ニ付、正二位様依召御

参朝、御陪食被為蒙仰候

但大礼服御着用

一同日左之通御連名御出願相成候

臣等叨リニ海岳ノ朝恩ヲ辱シ而空手徒食、毫モ國家ニ報スル所ナシ、実ニ恐悚ノ至リニ堪ヘス、窺ニ惟ミルニ、歐米諸州今日文明强大ノ隆盛ヲ致ス所以ハ、皆人民合心協力結社、自國ノ大利ヲ興セリ、臣等モ亦之ニ効ヒ、曩ニ英國竜動留学蜂須賀茂韶及至願候鉄道汽車ノ儀相談申越候通り、共同會議シ会社ヲ結立シ、鉄路汽車ヲ興スコトヲ希望ス、仰願ハクハ臣等ノ素志ヲ遂シメ、前件興立ノ儀允許ヲ蒙リ候ハヽ、臣等隨テ広ク同志ヲ募リ、共ニ此挙ニ從事セシメ、皇國隆盛ノ万分ヲ裨補センコトヲ奉懇願候也、誠恐々々、頓首謹言

明治六年三月廿三日

池田公章政

細川公護久

山内公豊範

龜井公茲監

池田老公茂政

毛利公元徳

池田公慶徳

伊達老公宗城

慶永

徳川從一位殿家令去ル十八日正院江呼出、外史ヨリ左之通被相

渡

(朱書)  
附札

願之趣ハ其方法委詳書載工部  
省へ可差出事

明治七年九月十日

〔史官之印〕

一十月三日御歌会ニ付依召御参朝、御探題ニ而左之通御詠進

浦秋風

竹芝の浦和の波もしつかにて秋風すゝし月のよな／＼

一十月四日本日阿部正桓様ニ而、章姫命清心院殿  
御神号御一周祭御執行相

成候旨為御知有之

正四位様より鮮鯛料 金式百疋被供之

同断ニ付猶又御同家大奥向より御通知相成候ハ、奥方様思召を以、

無屹度於松平西福寺御回向有之旨被仰進候ニ付、正二位様午後御

出門御参詣被遊、奥女中室多為御参相成候

一十月九日正二位様より兼而御願済ニ而、御方々様御同伴吹上御庭為御拝見被為入候、田安御簾中様・達孝様・鍋島筆姫様・寿典院様

徳川公慶勝

明治 7 年(1874)

にも御同伴被遊候

一金参百疋

菱木信之

一十月十九日御側仕懷孕二付、御家扶香西成ら上申相成候

一金百五拾疋ツヽ

安井秀直

但シ御誕生之上者、為御養育農家江御預可被遊旨、御内決被仰

高橋義記

出候

一十月廿六日岩倉右府公御簾中御逝去之旨為御知ニ付、兩公御聯合

一尾通信

松山秀造

一十月廿九日御表様より左之御届書御指出相成候

落合鉄藏

一十月廿九日岩倉右府公御簾中御逝去之旨為御知ニ付、兩公御聯合  
二而左之通為御悔被進之

岡地 茂

一生菓子 壱折

服部経夫

一同百疋ツヽ

仁井田三之助

内野欣次

須藤正安

池田武吉

平久保一清

関 栄四郎

新村芳太郎

小遣四人江

一同壹朱ツヽ

メ金弐千疋

第一大区(拾四小区)蛎壳町

丁目武番地内

正四位

松平茂昭内

輔

一十一月一日日本日華族会館ニ於テ幹事改撰投票之処、秋月殿・壬生  
殿御兩名多數御當撰、右二付正二位様ニ者御休職ニ被為成、御謝  
金半額外ニ為御慰勞金弐千疋会館より御贈リニ付、左之面々江是迄  
之為御挨拶被遣ニ相成候

一十一月三日天長節ニ付御參賀、於宮内省御酒饌御頂戴被遊候

一十一月十五日左之通御届書御指出ニ相成候

明治五年七月廿八日御渡之御門鑑御取調之儀御座候ニ付、番号

其他明細相記御届可申旨、本月八日御達之処、則別紙之通ニ御座候、此段御届申者也

但シ正二位様・御簾中様より御添御法事御執行ニ付、左之通被供之

第壹大区拾四小区蛎壳町  
壱丁目二番地

正二位松平慶永

式部寮  
御中

但別紙之儀ハ御印鑑雛形詳細認御指出相成候也

一十二月七日正四位様御実母寒月院殿貳拾七回忌ニ付、松平直靜様  
より於天徳寺御法事御執行ニ相成、右ニ付正四位様より御附御法事御  
執行相成筈之処御留守中ニ付、正二位様・御式所様より思召を以

御香奠 金貳百疋

右被供之

一十一月十六日本日午前十時正四位様福井表江御発駕被遊候ニ付、  
御式所様より新橋停車場迄御見送として、御使蟹江太平罷出候  
但シ十二月十六日御帰京被遊候

一十二月廿日正二位様より左之通御届相成候

明治五年七月廿八日御渡之御門鑑御取調之儀御座候ニ付、番号  
其他明細ニ相記シ御届可申旨本月八日御達ニ付、則別紙之通ニ  
前八時より御参詣、御經中御詰被遊候

御座候、此段御届申候也

正二位様  
御香奠 金百疋ツヽ、被供之  
御簾中様

式部寮  
御中

第一大区拾四小区蛎壳町  
壱丁目三番地

明治七年十一月十五日

正二位松平慶永

一同日有光院様御一周忌御相当ニ付、昨廿三日夕より於天徳寺御法事

御執行相成、正二位様・御簾中様御經中御詰被遊候

正二位様  
より

御香奠 金百疋ツヽ、被供之

御簾中様

御香奠 金百疋ツヽ、被供之